

16 薩摩御用商人 濱崎太平次墓所跡(竹林寺)

西区本田1-9-3

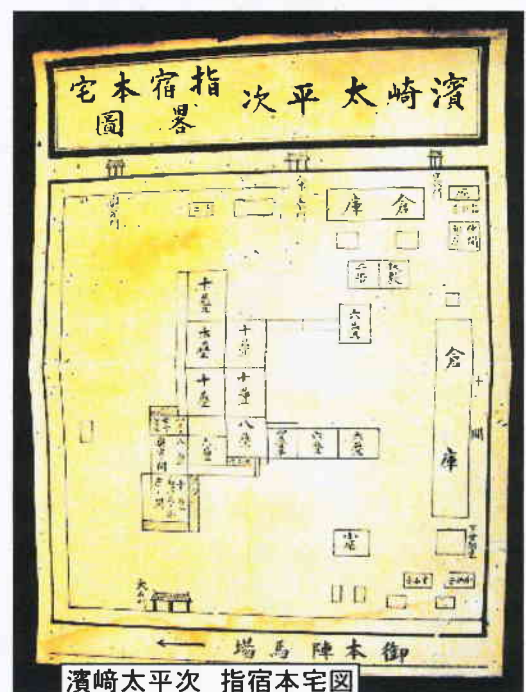
▶ 濱崎太平次は、薩摩の指宿で商売を行い、「ヤマキ」という屋号の船問屋で、日本の豪商年商上位ベスト10に入るぐらいの豪商でした。第5代目の濱崎太平次(8代目)のときに店が栄え、寛政年間の長者番付には263名のうちで1位になっています。第7代目のとき事業が傾き、継いだ第8代目 濱崎太平次は14歳で店主となり、家業の復興に全力を注ぎました。当時財政難だった薩摩藩は、家老に調所広郷を起用し、財政再建を命じます。そこで、調所広郷は濱崎太平次(8代目)を鹿児島に呼び、薩摩藩御用商人に任命しました。唐物を密輸入し、琉球や奄美の砂糖を大坂方面に売りさばき、膨大な利益を上げました。濱崎太平次の店「ヤマキ」は、藩の財政再建に貢献しながら店の事業拡大を図り、持ち船が34隻以上となり、函館、琉球、長崎、大坂、薩摩の甑島、鹿児島、指宿港に支店を構えました。「海上王 濱崎太平次傳」によると、大坂では西区立売堀北通六丁目に支店を構えたようです。肥後孫左衛門を支配人として起用しました。また、「濱崎太平次翁之略伝」には、店の所在地は同じですが、更に、立売堀川と木津川の交差点のあたりにあり、「薩摩藩邸」すぐ隣に居を構えたと記されています。この薩摩藩邸は、薩摩藩蔵屋敷の中の下屋敷に該当すると思われます。文久3年(1863)、濱崎太平次は用務で大坂の店に來ましたが、滞在中に、病で倒れてしまいます。小松帯刀がこのことを奏上したのが、孝明天皇の耳に入り、天皇の侍医を派遣させ、治療に当たりますが、同年6月15日、50歳で亡くなります。死去の知らせを聞いた島津久光も嘆いたといわれています。遺骸は茶毘にふされ、ここ竹林寺に密葬されました。その1ヵ月後、従兄弟の清八郎も大坂で亡くなります。清八郎の曾孫にあたる、俳優の浜畑堅吉氏は、自身の祖父から「太平次と清八郎は暗殺されたと思う」と聞かされたようです。遺骸はその後、指宿に持ち帰り、本葬式を行なった後、現在の墓所に葬られました。鹿児島の錦江湾 指宿港に太平次公園があり、8代目の濱崎太平次の銅像が建立されています。また、その場所から600メートルのところに墓所があります。



第8代目 濱崎太平次の墓所(鹿児島県)



濱崎太平次(8代目)銅像(鹿児島県)



濱崎太平次 指宿本宅図

17 朝鮮通信使ゆかりの寺及び韓人塚(竹林寺)

西区本田1-9-3

▶ 朝鮮通信使とは、室町時代から江戸時代にかけて、朝鮮から幕府に対して修好・慶賀の名目で派遣された公式の使節団のことです。特に、江戸時代には、慶長12年(1607)から文化7年(1811)にかけて12回来日し、朝鮮国王と日本国大君(将軍)とが対等の礼をもって国書を交換しました。主に将軍交替の際、慶賀のために来日しました。12回のうち1回だけ幕府が対馬で対応したため、来坂したのは11回です。

朝鮮通信使総勢400~500名は、韓国の釜山を出港し、途中対馬に寄り、瀬戸内海を通り兵庫浦に停泊した後、大坂へ来坂しました。大坂は川底が浅いため淀川口(現在の大阪市此花区伝法橋付近)で川御座船に乗り換えました。この川御座船は土佐堀川を通過して大坂市中に入り、難波橋をくぐってすぐの南岸の雁木(がんぎ:船着場における階段状の構造物)に到着。そこから一行は上陸。諸大名等が提供した馬等を利用し、宿所である北御堂(西本願寺津村別院)で数日間滞在します。このとき、大坂城代による饗応の宴が催されました。特に大坂の文人との交流が通信使にとって印象深かったようで、書記の成大中と交流した木村兼葭堂は朝鮮でも有名になります。

そのあと、淀川を船で上り京都から陸路で江戸に向かいました。その間、守山から彦根までは、中山道とは別に、近江八幡・安土を通過する「朝鮮街道」(専用の道路)を使用しています。この道は、関ヶ原の戦い後、徳川家康が上洛に使用した道で、諸大名ですら通行を許されませんでした。また、道中では、随員と日本の学者や文人・庶民など多くの人々との交歓が盛んに行われ、交流が図られました。

竹林寺には、11回目の通信使で客死した金 漢重(キム ハンジュン)、崔 天宗(チェ チョンジョン)の墓(韓人墳)があります。

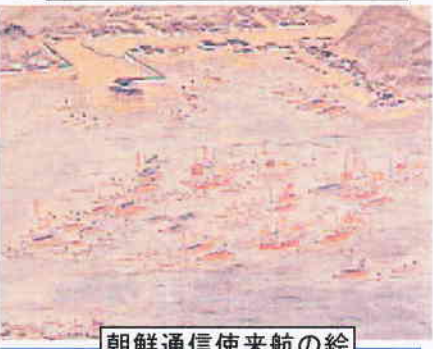
金 漢重は、明和元年(1764)の通信使の小童(しょうどう)で、厳寒の玄界灘で暴風雨に遭い重病となりました。大坂に着くと即座に床に伏し、竹林寺に移され漢方医によって看病されました。金 漢重は病床に伏している間、故郷に残した二人の子どもが忘れられず、それを哀れんだ人々は、年格好のよく似た二人の子どもを枕元に座らせたそうですが、看病の甲斐もなく異国の地で亡くなりました。



竹林寺



金 漢重(キム ハンジュン)の墓



朝鮮通信使来航の絵

**朝鮮通信使と竹林寺(大坂に残った船乗り)**  
 大坂に残った船乗りは約100名いたそうですが、幕府は、彼らに対しては上陸を一切認めませんでした。監視役は対馬藩が務めました。しかし、長期間船中での滞在だったため、ストレスによる発病者が増え、幕府は大坂の医師を派遣せざるを得ませんでした。また、「慰労」という名目で上陸させ、相撲をとらせるよう対馬藩に指示しました。朝鮮側から日本人との取り組みを依頼しましたが、幕府はあくまでも日本人との接触は認めず、朝鮮人同士での相撲を15番取ったといわれます。彼らは存分に楽しんだそうです。その相撲が執り行われた場所が「竹林寺」でした。

## 18 外人 雑居地 の 跡

西区川口3(川口聖マリア幼稚園前)

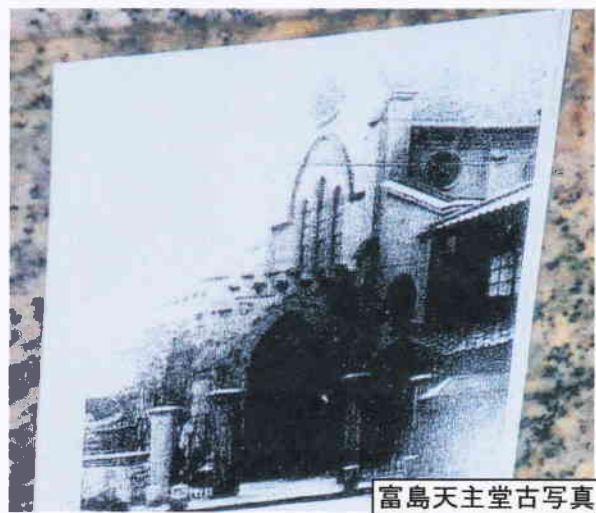
- ▶ 川口居留地とは別に内外人(日本人や中国人)の雑居地の跡です。案内板は、川口聖マリア幼稚園の前にあります。中国人が経営する料理店や理髪店があったことから、この地域一帯は、川口居留地の外人だけでなく長く居住した中国人の文化の影響を多大に受けた場所でもあるのです。



## 19 富島 天主堂 跡

西区川口3(川口聖マリア幼稚園前)

- ▶ フランス副領事レックの請願に基づき、明治12年(1879)、ここ富島にカトリック礼拝堂が設立されました。本格的な赤レンガ造りでゴシック様式の建物は、大阪府庁江之子島庁舎とともに、当時を代表する洋風建築でした。  
【情報提供:大阪龍馬会 幹事 小川満也氏】



富島天主堂古写真

## 20 大阪税関発祥の地 21 大阪税関富島出張所跡

西区川口2-9-20

- ▶ 慶応3年(1867)、この地川口に大阪税関の前身である「運上所」が設置されました。慶応4年(1868)5月1日外国官判事「五代友厚」(初代大阪税関長、後の初代大阪商工会議所会頭)・同「陸奥宗光」の両人が事務を取り開所しました。明治5年(1872)11月28日「運上所」の名称が全国的に「税関」に統一され、大阪税関となりました。(現在、この日を税関記念日としています)大正9年(1920)、大阪税関は港区築港に移転したため、この地に富島出張所が建設されました。しかし、大阪税関富島出張所は、長い歴史に幕を閉じ、平成20年(2008)7月1日廃止されました。



大阪税関富島出張所跡

22	大	阪	開	港	の	地
23	川	口	運	上	所	跡
24	富	島	外	務	局	跡
25	明	治	天	皇	聖	蹟
26	川	口	電	信	局	跡

西区川口2(元大阪税関富島出張所敷地内)

- ▶ 大阪税関富島出張所の敷地内に上記の碑や案内板が建てられています。  
 慶応4年(1868)7月15日、この地が大坂の開港の地となりました。  
 日米修好通商条約調印の際、アメリカ側が江戸と大坂の開港を希望したのに対し、幕府は拒否し、慶応3年(1867)12月7日、「開港」ではなく「開市」となりました。  
 その後も列強国は、大坂の開港を希望。幕府、さらには明治新政府と交渉をします。  
 新政府の外国事務局判事として大阪在勤となった薩摩藩の五代才助(友厚)や、海援隊の陸奥陽之助(宗光)の働きかけにより、この地を開港の場と決定します。  
 慶応4年(1868)5月1日、川口運上所(後の税関)が開設。  
 そして同年7月15日、大阪港が「開港」。  
 「運上所」とは、幕末から明治にかけて、開港された港で輸出入貨物の取締りや関税の徴収を行う役所のことです。現在の税関の前身です。  
 明治6年に「運上所」は「税関」という名に統一されました。  
 明治天皇が、明治5年(1872)5月28日 大阪巡幸の際、ここ川口運上所で休息されています。

川口運上所跡  
 川口電信局跡

慶応三年(1867)、この地は大阪税関の前身である川口運上所が設置され、外国事務局税関事務を取扱っていた。明治二年、川口運上所内に川口開設され、神戸まで架設された。これは日本最初の電信線であり、大阪電信発祥の地である。



明治新政府の外国事務局判事として大坂在勤となった五代才助(友厚)、陸奥陽之助(宗光)



五代友厚像(大阪市中央区)



陸奥宗光像(和歌山市)

## 27 古川跡

西区川口2(元大阪税関富島出張所敷地内)

- ▶ 洪水被害の防止策として貞享4年(1687)、河村瑞賢により開削された「安治川」に対し、もともとあった川を「古川」と呼ぶようになりました。この川は昭和27年(1952)11月、大阪府の防潮堤工事にともない埋立てられました。

